写真班　　梅崎春生

教材のねらい

1　選定の理由

この作品で主人公は、自分の家にいながら、自らは望まない訪問者の侵入を許さざるを得なくなり、自明なはずの自身の存在や権利は、侵害され、徐々に不確かなものに変わっていく。まず写真班が撮影に関して、住宅が公庫からの融資によって作られたことを理由に、持ち主に裁量はないと主張する。この写真班が訪問できたのも、遡れば、電気屋が訪問する側の便利を言い立て、主人公には不要なブザーを設置したからだった。自身の権利の不確定は深刻な話題ではあるが、テンポある会話によって、ユーモアも感じる描きぶりである。

自分の家や部屋を、他人のまなざしや交渉から自分を解放できる空間としている人は多いだろう。それが機能しなくなる体験を、小説ならではの不思議な世界として楽しむとともに、自分たちの生活を根幹で規定している現実の制度について考えたい。私たちは、部屋を自分だけの空間としたり、逆に、部屋やさまざまな持ち物によって自分がどういう人間かを周囲に示したりしているが、それは、世間や国家などによるルールの共有や、経済の仕組みの共有に基づいている。アイデンティティの不確実性は普遍的な問題でもある一方で、それを支える具体的な制度は、近代という時代が生み出したものであることを、作品内の世界と現在との共通点・相違点を通じて考えたい。

2　指導のねらい

作品世界では、漫画やお笑いにも通じる不条理が起こっていくので、まずはそれを楽しみたい。それらは、整合性はあるが常識とは微妙に異なる訪問者たちの論理によって成り立っている。それらのしかけを意識しながら、私たちの日常生活の前提となる制度を考えることへ導きたい。また、表現の特色も理解したい。

(1) 場面展開に即して、主人公が感じる理不尽な思いとその理由を、他の人物の言動や状況との関係で整理する。

(2) 作中人物同士の非人間的な関係をイメージさせる設定や小道具、また表現の工夫について理解する。

(3) 作品内の物事から時代背景を推測し、現在との共通点・相違点を考えさせる。

(4) 各自の日常的な行為を規定している前提について、身の回りの事例から考えさせる。

3 評価規準

(1) 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。〔知・技〕(1)ア
(2) 常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字を書き、文や文章の中で使っている。〔知・技〕(1)イ
(3) 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。〔知・技〕(1)ウ
(4) 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。〔知・技〕(1)エ
(5) 我が国の言語文化の特質について理解している。〔知・技〕(2)ア
(6) 「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。〔思・判・表〕B(1)ア
(7) 「読むこと」において、作品に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。〔思・判・表〕B(1)イ
(8) 「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。〔思・判・表〕B(1)ウ
(9) 「読むこと」において、作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。〔思・判・表〕B(1)エ
(10) 進んで小説や随想の表現の仕方・特色をつかみ、作品の成立した時代や背景について調べ、学習課題に沿って、時代状況が現れている部分が作品のテーマとどのようにかかわっているかを考えようとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕